新沙石集

四

へ 13
526
4

門へ13
526
巻4

宮城県図書館

へ波10
526

新選沙石集　第四目録

聖徳太子の事

墨書法師の事

観音の事

恵心院源信僧都の事

満足する者鐵鬼となる事

慳貪女の事

河内国でのはさまの事

賢とめく男の事

猫の獲る鼠ねずみこくの事

西域のたらりんのこと

新選法石集 第四

聖徳太子の事

和云豊聡耳法大王聖徳太子の事　いん人皇三十二代
用明天皇の皇子也。母い間人穴太部の皇女なり。
推古天皇の世に居て弟橘と称し。天皇の
るとゝのゝ仏法をゆゝしつゝ皇憲を
制定せらの用明いわまつ殿より推古天皇第四
の皇子也。称の豊日尊。敏明天皇三十一年正
月朔穴太部皇女ゆめより西方より金色の僧さ
らりてゝれよ救世の願わりとゝのひてゝちの中よりとび
入と見えまひてゝなどろさて皇子よかうろよ豊

日のはてまでもこゝむ所なるべし。聖人と仰ん
とゝくまでもわれ懐妊わらべ胎のわいぶ十二ケ月也。
敏達天皇二年正月一日妃菅宅と巡行し給ふ。厩戸
よりいでたまふと誕生まわらべして厩戸の皇子と
号したまふの時さいたりうこん金色のひらさして天竺
炬燵をちうりうげん毒のあるうして神異強き瑞巖
牧胡惜性よりわらべ太子二歳の正月二月十又日に
しめて東よりむかひて南無仏とたゝへ右の手をとゝ
ぎれりとうづくひらきたまへば白色乃仏舎利
わらべの法隆寺の法舎利ちれるり八歳しり学
よへくるゝ玄の国と渡しかゝて来れるゝ

六さいの冬十月百済より疏論并経師禅師来
りてきたるパ歳の冬月新羅より仏像を献
ぜ太子のいく西国乃重人たわう年尼仏の貴
僧をもて来せるまれと云ひけるさへ福代
かゝむりとゝくゝ十二歳の七月百済より日羅工人来
て伽藍ひらりとたるつ太子とらいたゝしていく
数礼敬世観音像燈炉宮栗散まとゝ太子又眉
間ゝりひらりとたるつしゝ約日のごゝ太子十又のれ
時用明帝位りり治二年るり太子十六乃時
四月より父用明天皇金堂しゝ御やゝ太子禅陽
百寮三寶より協もて人さ皆と奏しゝたゝまふ物

郡の守屋大臣中臣連勝海連おほびで国神とそむ
ひく佛の神をうやまつらいひて佛法をほろぼ
さんとおもふ守屋大連と蘇我馬子宿禰とこ
とをあらそひて泊瀬部の皇子平郡神平葛城
臣大臣稲村の城にとりこもりて戦ひ
ける矢に射られ死ぬ泊瀬部の皇子
は敏達天皇の御孫にして穴穂部皇子
の弟なり皇后は推古天皇なり
軍三たびまけぬ四天王の像を
造りて願をかけ給ひしに勝軍
なりてこの願をとりてこの
寺を建立し給ひ

四天王の像を造りて願をかけ給ひしに
勝軍なりしかば願をとりて
のこれるなり寺をつくりたまふ
とかくるこの大臣同
心ちからをあはせ
ける矢をそこなはれて
中をとりて変のかくるまで
大臣の樹木の上に登りて
大神の矢をいひてこの矢を
厩戸皇子舎人逆見命尾に命じて四天王の像
矢をいさめこの矢にくくりつけて守屋が腰
よりうつして樹木をきりたおしてこの我願をとげ

満宿禰又是とゝるへしと云て小勝ちゝつまらく
り屈ぐくびとさうたこまれと又なをひて如我昔
願今ちいこ満足しいひ寺屋ゞ軍たちまち
よ御ふれ官軍大連ら家よ入つそのちたこいい四
天王寺とつくり蘇我大臣興厳寺とそつ周防前
帥ゝ滅ふ海天下と初さめ陸ゝ又ケ年ゝこの年鎮
明天皇の如敏達天皇の后豊御食炊屋姫よ
生と二十六年ゝれと推古天皇とゝ廐戸皇子
と皇太子ともていまし交番よ居して万機ゝくを
任若干国紀ゝるのひ寺ゝと改造ゝて太子并よ
大臣ゝ話して三寶と興隆せしめこの物家議

て崇敬仏像とつくる純中太子父用明并よ世と
の天皇のためよ法隆寺学問寺ゝの七伽藍をた
ゝ推古天皇十二年太子三十三乃治年憲法十
七ケ條と製しゝれと奏しゝ天皇太子ゝ
こび敬ひて同十四年丙申寅天皇太子よ請ていと
く勝鬘経ゝ講ゝ勝鬘経と講しゝ所へゝこのゝ
時太子ゝ年三十八ゝ成ゝ寺ゝ
ゝそとゝ成ゝ寺ゝ三尼の蓮花面ゝ
住ゝふりたけゝ時ゝ天皇歳賢わりてむゝ妻
の鵤舎ゝそつゝ太子ゝ
かゝけゝ寺ゝそゝ

同十八年丁卯右子紫雲寺の住持南岳衡山般若
寺に行り弟子大師と共にはつてひらして坐系
しをりしよぶ学の法花経と況の箱に入りた
る是を法覚じていまゝ閑ざるりいくらの法い我
法ゆいに北斗生同明僧のしるしをりぞ故い来
れ生に舎の舎文字しと歓喜来首有の有は文
字ととの僧居眠して燒そりしを閑て見て
と作くを出しくいぢらいて見るるたがいで我法成べ
夢敵に七日は籠りあり青龍車に乗して天百
人とたくさん前が衡山にいらむしの出巌窟に
してざりうの見てくらせをまひしりを同廿一

年癸酉右子四十二は第五の周は石川の郡新長
山のふりと墓に乃乃とりと見ひて現地文に置
作器山の竜に所を余人をとたくさりけるに弱御
に出でまりてたくまぶたる敵とくに入まるへ
たるるるおぐら物そでまるが右子ここの作り
小龍人所と見ん立まるひてるるりがるの人乃わ
まにあゆこりて悟てわられむへしく法為人ぞ
をあるいち紫の法衣と脱てそこに入る賞和尚と法花山
科照邪作器山の飯に龍而所せる猿人衰祖乃
を附龍人前とおこさて奇と賜ちこへて

怒濤の岩川を過ぎ社書まで佛名を唱ふ

の仏人の面貌美相ふ

くさうちの金色のひらわりぞ乃身をあらぶ書

ありの人のさくまわるまで仏人とたさとあひ

ぬ人ある数千云人もれとるるのし文ゆくを

まひてのちつくひとはけうりてみなしひ仏人たや死

去せりは彼ものうしとゆまたさあいれこ活ひて

人とつりて墓と大つくり葬埋大居るる子大変

おのいつくたるい貴く仏人いいやしく仏ゆるるしら

ゆりてわひうり又孫敬也彼そそ死そうとびて

て京墓しんやしそうしたるのいつく

ちんちおちやく所墨山ゆきて墓とひらいて見ん

つしとうせ人の大変ゆきく指と開て見んう。

その屍わるるるの。但しふりご香し夜叉指の

ことを大丈おれと見たさあやしたさ平平

思議る嘆しまりうしてけしとやそ。

勢ゆきを意そうひつしその弟と頭したうり香

人間彼地とうりてそ夜叉とそりうせこれとん

ゆそうれ事りしのしく柳蕩伽梵教ゆ宣恵の

二わり豆則い道塵とたさしい宣恵の二聖ゆう

されしり吾教の佛法始ありしそう

墨雲法師の事自観師のう

漢云雲雲雷法師いたりめる聖乃の人也一切法中
ま那とはたらんといの願とはこしてぞこで二大集經
ま部まそでつりぞよりひまそでは聞く異薄沈成し
ちりぞ乃願とちまそでとりるんまとるのけさて
いのちのごらんなめまは祇園源といの仙人はそつる
わひて仙方と佛へそりりの仙人命は一千七百歳也げ去
の仙法十悪つまへはて流ちまこさ
うまはゆきわつり雲雲雷のいまく佛法の中は長生
不死の術法乃あまを宇。我命と西ら業とうら仙法と
はそりまくぞその仙法と三義はんをめまへ三義
拙見して去はのげまそそまうまこまでぞ仙ぞんこれい

いんごといはまこさそうその無るまはとりたして懷
ら觀法とそりりしていはやいぞその仙法は長生
不死法わりまも延寿の術つまるのぞとべうくわく乃
はのつへ二界有為乃法ある拙也あれとるのくふる
い悪魔の玉梯流精のまくひるのり法はまなぐ
死とまるれ不生不滅と法は岐樂石選の宿とまりて
ちまじやうと一子のごまく利益まそ法いもれそわれ
とそ一まその觀法音乃法とわまくらる雲雷もれと
乃くく悪魔とまんげしてぞのいち十数の仙法とば
和尚は燒もそたやうりりまりぞうつ
番沼とりて面と西ま会体しまるのら命とりり

けう時に成中に　とんぐく者もえあらはしてこそ
更ふりてとそなりける　道とはいふとれへ浄土ふの又祖の
初ともていはゆる四雲雲僧道綽　高僧小康也

恵心院源信僧都の事

和尚恵心のそうづとは　俗姓は卜部氏　大和の葛
木の下部の人なり　父とは故親といふ　母は清原氏也
そもそも父母男子なくして　尾寺に詣ける　観音
よ三ケ年のあさ　ゆめのつげ
ふる僧たちあらはれ　一顆の丸をあたへ
と見て　懐妊せり　九月満して　男子
うまれ　利智の人　説の口　僧侶

そもそも河内　抱　養育　七歳の春　父
病　とうけそもそもけるなりのあさ　と　貴人
まろうて法師　ものを　父母の　頭　
ちらをたへ　いの　そのちひ　父の
いひとそ　ことば　とひつる　尾の　観
音堂　まいりぶられ　紙　父のらいたの　
られいさぶりて　父の　通　
と思ひ　ぬ　
つゝ　夢　
けまい　大　
面　僧

寶ゝあるらびくりう澆とわるとつのりぷんちはい
嶽山ゝちのやり横川の水ゝ寶へしゝ泉し
ゆまゝゝ刃ゝくゝゝ行きいはけしゝと母ゝゝちなゝ
い恩厚懇懇の衣裏乃孫と前摺巖の法水ゝみぐ
ゝ助法の價乃まゝ如の燈代寶相平ゝ乃蓋上ゝかく
やく夏夢ゝのりゝ毎上ゝりゝこびゝゆゝひゝろゝ処ゝ法
嶽山ゝりゝ大廻の法ゝゝゝゝ程のかゝひゝけゝりゝびゝふ
現と法宝のにゝのりゝと刃ゝく我山乃産ゝ蓋直大
潛乃のはゝ背ゝゝゝゝゝゝゝゝ毎ゝゝゝ
うゝやゝわゝけきべゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
はゝひゝとゝもゝのゝゝと前ゝゝゝゝゝ毎上ゝ現ゝゝ

ひゝひてのゝゝゝひけゝゝぷゝの親乃ゝとけゝゝゝゝゝ
ゝゝゝたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
く字剛といゝ天の君ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の法ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人い母舎ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
母ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

正一位にのぼり給ふ和歌の相伝ことごとく
てをかられ給ふ一切千指ゝして陳倫
の奥旨とをきわたる会三千のりくんかうその源と
せり十三家ゝして無量院の法灯とぞ
けり二代の八数の流とうけ三密又智の源とつゝ祇か
の恵果ゝこれていつくゝ玄玉て青龍寺の月蒼ゝ
ゝ玄奘さのてうらびに白六源原の霊彩ゝそりぬ
法世ゝいそで恵心一人のゝらくゝ村上天皇の御時
天暦十年六月廿一日清涼殿ゝ初ひらく又日十度の
御八講わりけゝるのの恵心の音流と一天の君臣と
しめして恵信正一ゝ位ゝ伴乃ゝ僧とわひ

ゝて紫門わり今度の八講と勅ひせらるゝ
ゝけきい僧正面目とかゝくしてわひゝて紫勅そ。
いまゝぶ十三ゝ年ゝ有りゝ年ゝ毎ゝ日ゝ毎ゝ夜ゝ
ゝ恵心のゝそひゝ一ゝ人ゝ法服ゝ金襴ゝ
ゝとゝ言ゝ元ゝ一ゝの和ゝ歌ゝ書ゝ記ゝ水精のゝ
ゝ三密ゝ山の宗門流ゝ雲ゝ一代聖教の法集乃ゝ対一千
の大法流の中ゝ法ゝ師ゝ天獅
ゝ乃ゝ言ゝ元ゝ一ゝの乃ゝ如ゝ紙ゝ
ゝ雲ゝ一ゝひゝぎ大ゝ

云とわらひ給ふ舎利弗の智恵清浄して菩提那乃
新発意のひわざわざうつくしうぞ有しかばりなき
ぞうの君香呂箱と浦茶の方にまれつぞれより
恵ん僧都とりされ給ふ八海法願の法白川の法
唐ゝうしら毋のはるもこしらけまいばかりかなう
秋山寺へのがりしてうつ学道にあり一天の君たれ
ものてまつるゆしとるりしの射面わるべきうりぞの
なかいさてこ是面衆の神代もえんまら毋代もえんさ
てまつらうちうしかりしけるれ行ゝ浦文とうき風鶏
の浦衣異にして大和国乃玉へとうりうへ毋の
はるゝゝ浦ゝ影形道絵ゝ文毋のなぐさ晴浦代そ

きけうぐゝひもゆうへなかいさてこ是面のさうら
ふきとうるる女鶏ゝ毋ゝ信施物とうるる
るはちるぐゝいかれ代ゝ毋ゝ用ゝ毋ゝ
ゝそう技技とりさ世とうるべき義ゝいべ世家
ゝ面ゝ文ゝ孫とうそゝ世ゝ家ゝ
ゝうるゝぐゝのぐうるゝ浦ゝぐうそゝ家ゝ
ゝ毋ゝうぞのうち浦弥ゝ一ゝりひうち父親
のがぐいとりのゝん師函ゝ浦とゝ
て十二年の日義居ゝて九夏三伏の天ゝ白雲代
ものぞゝ代花とうゝ云色恵書乃代ゝ色浦代
そうひて云の代とくゝ代観浦代の窓のうちゝ

三千一会の月と共に消滅若の森乃上に一系
實相乃雲さむし。一切種七千余年枝葉しぬるゝ
千変万化して十二年の後さらに保勝古神之へ
七日こゝろ法せがゞい之のゝ上されけり。滿散の和
のゆめ神仏乃御戸開貴女一人出まして未代
乃ちゝのしやう出給乃要道とそゝぐ乃るわれ
陰仏と会ぜしゝとゝ乃しゝ出給ひ神
初まりて一切法の中ゝ乃法生要集撰集しく
三千世界ゝ法人乃法生とゝ乃ゝ乃要集
廣ゝ法ゝ法ゝ乃ゝ家朝の天子三ゝ乃ゝ
貴婦乃婦男女まで乃要集と女ゝ乃ゝ乃。

月の六神よい貴賤道俗わらはしひ文とちやう
りんとる時とものゝ日なりしひ百神源信如来と
乃へて三度伏拝とゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ四十二
巻の河中嘗下向しゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
母乃意しゝ大和の国とまりの雲の下ゝ
そ我母の御屋ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
二人わひそして西海ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
で和国ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ秋のくれ
て乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
河西ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
けりゝ。山路の庵の河乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

そこ一ぞふ食のみやこよりつゞせたるとさんけいを
てかづら髮のたりこかりのはて ちくなりけるよ。
ぼ〇よ母はあのは使よ山へまつりけるト男清みみ
とさけて笠むやよわゆきけるが宿敬とあんつけ
きり母はぜんり清重労よりくそくいき急ぎ
まつりひよこれてわひたくまつるものうまさ
よわりぐそりけるは持源うかとやでば文とまる信
敬い老母の男死一生の音信とそて文代ようえ
かづらひらいてみるよわさりびあつれふ一絶へ命
まひけると二人のは栄てるるこぐ代はさ海く
そてめやていさ一笠よといるぐあまふは心のうちそ

そてるのけまふるさとの田宅よりうち張へ二秀
くまよれく窮秋月日乃弓箭り百草とくそ
はちぼ菊まづよ繁霜の松と用うぼるみか
ひよりうちそろわりさ面武蔵漁父が桃源よいく
つ。窒晨沉放事が山ちうよ仰そ母上そ
そうづと語はあまひてのさまひけるは親よのはい
び香げけまは病床の稼らうまとられ新まる
や。我伊の老衰いのよとびでよ四十よわまる
経の老僧とあり張るそてるのけまぴまでつ
ねよ男系ありしるぼうこそよかりめは
らん対面の弱とはそうちやへとよはあるよ

よ書そうしいさいでうちんぞうのぜんちゑさのに
めるりぷるそでよそのぬるり念仏の声うり外に余
のていどもしへ感ぐるもて仏の相好うり外他のるす
心とうつそうまつく知識よわんりぷさい浄土ふ
ぜへしそこづぐ西よりひてるど合て十念み
ぐれどそのへるまへいぞうづも看病のんぐるたす
念仏て称名十遍おまりすとびて移りるごとく
寛和元年九月十八日の間乃時よれ年七十ぐく
氣絶あまへり。海てすす巌寺なるすじやうん
なげぐその中乃ぐろこびるれた信邪七業の時すれ
しうり四十二ぐくはけめて対面わりしるのれば

なぐうりのさけぐそうあわれるり親子の使遇只一
寝の夢のごくなれば。富源の行乃ぐうめすす老
老ぐうりしす念成就の合掌乃体とるく絵ふ云
間はぐる見とせりぐでるす七日過ぬれいるともるぐうか
しけまいぞの巻ぐ習しくびすけひるい山す撃のば
ぐるくぷのさめぐてまりぐまけりるこてわりぐけまして
よこそ毎よとるのへ源うてくるとさざめてどくす
すうしやうしぐるのへしぷ我もるるぐでじやうどる浄
まして九品蓮のこよ毎とんこてまりる絵造の浄法
とたすよやへしぐくぷうじやうの行とこぐどつあす
長和二年六月十日御業七十六ぐてぐうろ茶敬の

かなるにもいろひ又色の糸とひくへて花厳経の偈に清浄慈門利塵数といふ文と面善円浄如満月といふ文と吟唱し禅室にへかてよく〳〵礙しぬへりしと云云

満足なる者餓鬼道とよんなるは梵日佛出世に證果の羅漢あり満足なるもとりにお恒河海辺にゆくひとりの餓鬼とよんなるその体ち方ちさなふして一由旬くちこれりてにふ大火とかし。まえつこうら血とおそくまきるすたとへやうのえ根及体のそばこゝうのとぬきる二三丈也眉月かく害猛火あてりがか燄えとわげをけぶりに百千乃霜のふうかてとし東西にゆもてつまて飢渇し。南ふりにまよひて苦悩せりなるちむれとまこていとくあんち生生はいろあるさいかうとつくるゆへに此生ゆく若どうくろや餓鬼ちて〳〵いへく我むりし法花経一句おたの比丘わりしと誓ひしまいらく此苦とうくる也。我いよむりしのなろのむくひて一日に千度利刀かのして舌ときりきけ元もひろのつ耕すく。そるもの我わくごうの苦と閻浮提にふしてわる今にありきこうしと来しゐまへ我餓鬼の身とうけしものゝ億千劫の間いまに一滴の水とけて喉と潤さず。ぐくにいりんや飲食の名字さへなくてきとゆかいもがし。此ましむとかりてほいへ又くさのむてちかくにかち無量百千劫

色よ信こそ大若愚よりわれへとうのこいひく
大ふ法さそひて同行してはこそうるは大山も
の綸蘭とろがでくして閻魔となりぞ獄卒と成
るもさてさてこそ。そるもいもれと凡金剛そもいとと
りへども眼よりも愚とるる。仏法そもいとりへども
はとそ。まび罪はるもの也と。一句と指もる阿鼻もろ
祭るはくのごとしぞ大地の中にてこそ三宝俳
謔とうくいまめんりまひけるとのりとこそ

慳貪女の事

梵因仏世尊一人の女の長ふわら心操慳貪は
さ。財寶とさくもへ威儀敬慎ありて仏法とそ

つまこの孫のくしてえ波羅蜜と法をば四徳也て
後四弘誓願とはこそ世の人もれ慳貪女と名
つけそうつる。一解とものこて人一これ屏風の中
ひとり居てもれば嗔もそわる時頻伽鹿そるる教
化そんがたあ一そんぞん女ろ家にいそう坊院し
給ふ。女のいくくそ合きりのりとそ屏風
の中へ入るもそのいくくそその食る解とわ人弱へと
約こう日中までたちかりけるとわ人をいく
和僧今日とこそ。わをもそぐ立ことなのいし。爰日
とうるとそもとめりう一つもわこうるるもわるへうるで
不審の傍うかとしているるもこそ。そ解と仰ぐ

ゆどいうくるへりうぞといふ女のいりくたるひ和歌
てしてて死ぬてそもわるそもてうるもわるもしと答
るんやさしいべ死ぬと紙をへしてそのうち卵たちよ
はうるあれい死鬢臨腹煩懐してんさるよ腹
のしそうそくそくもつべしといひとへ二三人をうち
て鶴し縄とつけてひけぞとうごうでそうりさで
と心はすへ人女へ人ないしへ六十人わつまりてひけ
ぞそううごでしるし籠鬢額廻釜一九万貫の拾四
とゆりし弁慶の懸心ゆちちち一二千人の激浪一
しふおるへ人云ちれい仏光子し頻額盧して大神
力也双魚の性海ういそうるへ四畳の月性し渓

童如の月度ういつるよ三密の月楽と流ごくと流
そんぞんのんといまりめんぞたのの故し千万人力と
合てといるをひきそうしそうるのへうぞ。ゆりし女
房うそもう弱へとぞへい。性貪女鼻とゆきへく
まそうりしよ立うそ餅とまうしきん生ろうる
まへといへやぞていきお弱ひぬえっわる餅と二つくわう
もんとうひく祈よへけるる祈しぷちちづつるりて
るゆまへべ女そそるのそんと祈とゆ。むるんつく
ひきて儀しそづされゆりけ生ぷその祈女ひひいし
わうりてきい祈うりわうきるりきりるのそのの時こ
生とるのゆどもゆ成つをび極ぞ。祈ぐくいるん

あめつちはそらもそのかぎりなく人のこゝろもまんとしるべし
ちの中に我かるいるのらば佛百へまうでゝ仏百へまうづるよりは又百あり車よりは七塔万寶と積てまうでゝ仏をくやしきんらんかうんまうしきしいへば苦患のそこへぐしてゆくやとへのぐくゆ佛百へいるだちまちよりは鳥獸鳴鳴と者ゆ惜悪二貪心をとゝめてゝ仏られがたのよりは流浪したまふ佛よりはして億累劫也とゝ

仏別傳ての義の事

和云中比迦のゆのよりは一百石位の義わらは位座所二云時中又ゝるゝ〻ふ傳てとのゝいひけまべ人傳て

のゝかゝしゝものづくさもろ〻の徳又えゝたる徳人もれとゝ
ゝれたゝりゝのとゝぞわゝへけゝそのゝろやゝとゝ
のゆゝよりゝ人人のゆゝかゝゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
へしゝ佛ゆゝみゝて夢ゝ見けゝゝんのたゝゝ徳
ゝゝゝゝかゝいゝりのゝゝゝ人ゝゝいゝへもゝゝゝゝ
松のゝゝ玉ゆゝ徳の華雲と常ゝゝゝゝの村
四面華樂の月徳のゝんゝの樂野花の味ゝ戸海花
居士乃丈玉までいゝゝ面ゝまてゝゝられゝゝゝ義の
仏儀とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
て頃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
我ゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

髪を乱わりてまぎれそぐ事あるべしとの
のられいるの法とやるとしてまるの四我さて部
の法るの心ちゆめて一の法行わり法しいるを是
飢えるの時紙鬼乃の苦と
奪へて行しも宝水しるを
法へと食ちんちぐの苦
ろくの苦しわぐしを法
食ちの時い天の身窮これて法るへしと観しり
ちされるを通と忍物るしを
つぐるのいし楽しわしの時もこれい物のすしるぐ
のちぐくらくちのうしのちわうぐん法るると観

して世るの示を蛇らにとぐけっぐ人ひるると
さてるのこぐと落し掌と入てぐ去よける

髪とめく男の事

梵日ひしし一人の僧あり。年ひるるく白髪せもぐ
当ちこれを二人乃妻あり。ひとりハ一人ら老そ
つぐ。ひとりハ又ちるるよるあるり。ひ男老婆がも
しるよりそるる。婆の日我ハ年老しりひるるぐさて
前ハ妻といってさぐんぐハいるぐさるんるれぐさる
ら白髪がし我と妻しるをいぐぐんちぐく
ろさること指もて我しかのしく女よ白髪ありし
めよさてしそ双そしんもるるるめといぐぐん

さしわりけるハ。妻がことばにおどろかれてくろき髪を
ぬきて白ゲをのこせり。又おろき妻のりくにゆきた
るハ我年よりし雲の鬢のまじるを変ぜんかと、んハさ
わらし霜雪を除してくろきのミのこし。夫男と云んも
人目も見くるし。我にもあらぬおもハれし白髪をぬ
きそりにかきすてにからしめよといふ。夫これも
るにしたがひえて又白髪をぬきてもとく白粉を面
にぬり青黛をかけてあたまにからうる頭にくろき鬢
いたくにかれ白髪ハいまぬきそて見るにゆくらそら。
小婦さうひて同世の中に人るをいらずかるべ見ゑそい
うかもそうるこぞやうくらんりのをかいて男にも鬱む

へしといひて逃ありけるが、ぜんかくとちくうしらとて
ミらかをたうしらくして老婦がりにゆきぬ婦が向
ひていひ畏らかをいふくまてそしても同のけ見れハ探臥
越を親許にかへ輪縦に遂倫がきらくうりにおひ倒さ
星。老婦ゆびうらきてわが見くろしかれうやと
て迎去ねぱ妻婦にましかれ我も人目ちかりまき
窓の外に涙かくらけるがいらにして世をまくたんと
思ふ事じて養命を守むらし男三歳に大かう
いかし涙を立て家をさらやうまてし又福にまされ
なかいかしと切かへて新作をんとかのひ立たらぬでかき
家まへ笑早の事又わら深き客まへ洪水の難わらと

はるひ自の夏湖たれば羅国池に開日も四又日夏
さい水の湖ちの。若よりて水のたるわるてとは
くれば日東ろしく早ゆるのち。霖夏自と深て法水
音よ蔵てもとうくるくなるれゆれいたらくと尽して疫
法しかやうよ夏陰いよりの。日照い若よりて
つろくよ春夏葉さけめぐくて生涯くらしめれい
ちくしやの新とうけてだとあるだと生れてもん一
仏如ろしに智図孫出り。一の天ほと夏ごてくと西よ
人里あるてやしもまれて。船のそるり東の雲よ立
湖いたのほとめぐりあそびて東ようよ湖いたそども
その食いまぶ東くろ又西の雲よそるり立

とわ夏いさりそもとそひて又ほとめぐりて西よ
そいまぶ東くもて。東ようよ西よゆくかどこほ
の中よてかつさそむるくるれうもて宝りぐく
乃くくんかかさりのくしとせほせもうるかわるも。
釋論浄く律六相よ夏くんくくり

静旅夏遊生観春園の事

漢云隋の開皇年中よ稲乃旅夏園と云ものに生
よ不退楊乃くくるもと云て。乃旅夏園の湯と園もてこ
と一千代又同像とつくるて一十二作長三尺の立
像なり。伝心とりけてくみて感夏と祈精。茶彩と
いくに宝如とりけぐくもり。夢よ二人の湯さくれり。

一人いそぐ〳〵日光と称し一人いそぐ〳〵喜多院と
称せるなんぢ此岡佛の化縁ともなりや爾義翁
ゆゑ二人の僧歓喜して田舎なんぢ濁悪中より
ゆゑ〳〵此岡如来より此僧をもとる一生の中より此ひてから
らば君恩の恒ふへ歓喜ゆゑ生まるるとぞ仏ん
めていつく〳〵指会をもつ。つうんだめゆゑ元ふ稽していく
報歓喜国ゆゑうもうもちやもとそく
慈覚大師夢ゆゑ不死の薬法服をもる
和云天長十年乗仁和尚ゆゑ四十九にて身つられ
まるこく〳〵〳〵てしめちく〳〵〳〵ざるもとる色
ゆゑひろい山のふり洞とそうぶ郡の幡唐法うもん

絶間より暫居し弥の今の前僧厳院色なり。二恵秘
密の義部裏八葉の心蓮と云へ。一心頓悟の所説より八十
余乃如法と称し。三ケ年のうちその心と法相を如法
ゆゑ法華経書写し。并ゆゑ四種三昧と称し。ゆゑ薬の
法位ふ行なて三千一会のごとく女覚の真仏法なく
もそのうち釈迦ゆゑ天乃薬と切てその形状を詠風のと
并序と喫ゆゑその味蜜のごとかうゆゑ人わりも
うちて云これい色三十三天の不死乃勝薬なり
ゆめさめて口のうち除熱る法わり。三度これとのむ
ゆゑ夢の味ゆゑとるるそ乃ちやう百日月法
弥て面〳〵かわり。眼頭乃ゆゑ明也。ゆゑ西色色

[illegible]ことのうちに法花経一部と書写せり。
そのかたちの[illegible]とりのこしおはりの雲中に安
置してのち[illegible]ことごとくして斉衡元年四月二日に
寂六十一にして天台[illegible]に住せり。治山十一年貞観
四年入唐して同六年二月十四日七十一寂みちぬ
滅し[illegible]同八年七月十二日伝教大師と同時に宣
下わりて法号を贈る慈覚大師と謚せり也
西域のでしにしたがひてしたがひ
[illegible]同じ西域にひとしのちにしたがひ
ありとしるべし慧[illegible]こしてして霊映明[illegible]
あれとあやまりて[illegible]漢よりいたらん因源と[illegible]

そのかたちに宝塔を富貴の家にうつしたてまつり
月命日に教誡の意中にハ解脱の風をつたへ
[illegible]あくまの家にいたりぬるのちひらりとんていたく
[illegible]門ひらしてとりて涅槃[illegible]
因源とりのくるのんち来来仏号[illegible]
とつづくこそく

新選浄土集四終